

04:完璧なイケメンと性欲ゼロの俺

カラン。再び、扉のほうから音がした。

ざわざわと一気に賑わいを増す店内。林田さんが晴香たちに言っていた団体さんが来たようだった。

「リンダさーん！ 連れてきたよっ。ご所望のご新規イケメンズを！」

先頭の男性が林田さんにイケメンズを紹介している。彼の後ろから背の高い四人の男性が現れ、それほど狭くないはずの店内を圧迫している。

一人目は、先頭の男性と同じように明るそうな男性で、林田さんに軽く挨拶を済ませると早速カウンターにいる晴香と友人に声をかけていた。二人目は、少し無愛想なきりつとした感じの男性。三人目は、長髪を後ろに束ねて首元のタトゥーと耳にいくつものピアスをつけている男性。二人は、話しながら奥のボックス席に座った。

最後の方は、最初に店に入ってきた男性のイチオシらしい。確かに、長身で程よく筋肉の付いた体に甘いマスク。微笑んだ表情が、いかにもモテます！といった感じの男性だった。

もちろん、店長の林田さんは大興奮の大喜びだ。

俺は今のところ自分自身で生み出すことのできない、性欲や興奮が人からどう生まれるのかとても興味があった。自分にはないものだから、単純に気になってしまう。人の感情や性的興奮がどう動くのかその後どういう作用が起こるのか知りたい。

だからこそ、恋愛している人を見たり恋愛小説を読んだりするのが好きだった。周りの人から恋愛小説を読んでいるというと、とても驚かれる。物静かな口数の少ない男が読んでいる本は恋愛小説だとは思えないらしい。それは、偏見だと思う。だって、俺は読むし。大好物だ。

それに、言葉数は少ないかもしれないけど、脳内はかなりおしゃべりなほうだ。俺って、意外と陽気な男なのだよ。みんな気づいてないけど。思考が巡りすぎて、ちょっと言葉にするのが苦手なだけだ。うん。

そんな俺なので、はたから見ると興味なさそうに見えるかもしれないが、店に入ってきた五人の男性がどんな人なのかそれなりに気になって、ページをめくる手も止めて本を盾にこっそり様子をうかがってしまう。

「朔、これ食べていいぞ」

翔一が大きくてつやつやなイチゴが山盛りのお皿をカウンターに乗せた。

「——っ！！」

「店長、あそこからしばらく離れそうもないから」

イケメンたちに夢中な林田さんに遠くから、心の中でお礼を込めて一礼。一息つき、すぐに俺の心はもうこのイチゴに釘付けた。あれ？花より団子か？いや、花も団子も大好きだ。イチゴうまい。

大粒なのに甘みと酸味のバランスの取れたこのイチゴはまさに高級イチゴだ。夢中でイチゴを頬張っていたら、いつの間にかイケメンズがいるボックス席に晴香と友人たちも合流していた。

知らぬ間に、合コンのように、店長である林田さんも交えてワイキャイしている。実に楽しそうだ。今まさに恋愛がはじまりそうな人たちの人間観察は楽しそうなのだが、しかし、でも今は、目の前のイチゴが俺を離してくれない。美味しすぎてやばい。

「ここ、いいですか？」

「どうぞ。……何か飲まれますか？」

「じゃあ、ジントニックを」

俺の二つ隣のカウンター席に、イケメンズの一人であるイチオシイケメンがやってきた。イチゴを頬張りながら横目でちらり。横顔も完璧すぎるほど完璧で、程よく高さのある鼻筋に彫りの深い目元は長いまつ毛で覆われている。近くで見なくても分かるくらいに肌も白くてきれいだ。モデル

さんですか？そう問いたくなるほど、横顔だけでも完成されていた。なんかそこだけ異次元みたいだな。

雰囲気だけじゃなく顔だけでセクシーなオーラを醸し出せるとは、羨ましい限りだ。俺なんて、よく例えられるのは小動物。顔は丸顔で鼻や口は小さいのに目だけでかくて、あまりバランスがよくない。ガリでもデブでもない中肉中背、一六七cmの身長は少し背の高い女性と目線はさほど変わらない。

高校の時に晴香にも抜かされた。できれば、あと三cmは欲しかったな。そうしたら、高いところにある本を頑張らなくても取れるようになる。たかが三cm、されど三cm。この人は、高いところにもサッと手が届くんだろうな。

ふいにイケメンがこちらを向く。イケメンをおかずにイチゴを頬張る俺を少し見つめた。

「おいしそうに食べるね」

ふふと微笑みかけるイケメンはイケメンだ。もう、神々しいの一言だな。

というか、見ず知らずの人を無言でガン見するのは失礼すぎだった。ごめんなさい。反省と謝罪の意味を込めて、イチゴの入ったお皿をずいずいっとイケメンのほうに差し出した。

「くれるの？ 美味しそうだね。ありがとう。ひとつ頂くよ」

嬉しそうに一つつまみ、イチゴの乗ったお皿を俺のほうに戻す。こんなにおいしそうに誘惑してくるイチゴをひとつでいいなんて、謙虚なイケメンだ。

「すごい！ 本当においしいイチゴだ」

俺がこくこくと頷くとイケメンはまたふふと笑う。その顔がまた絵に描いたようにまぶしい。普通はここでときめいて恋に落ちたりするんだろうな、と手元に置いたままの恋愛小説の本に視線を落としながら俺は思う。

あっちの席で盛り上がっている彼らも、ふとした仕草や言葉でときめいて、恋をしたり、昂ったり。そういう感情が動かされるのってどんな感じなのだろうか。いつか俺にも味わうことができるのだろうか。

恋愛は一夜だけでは難しいにしても、体験として体の関係ならいけるんじゃないかと考えたこともなくはない。恋愛感情がなくても、体の関係を持つ人は割といるらしいし、経験だけしてみるのもありではないか。性欲について学ぶことができるのではないか。

いや、しかし、勃たなければはじまらない。勃たなければ挿入できない。性的興奮を得なくても機能としては正常だから擦ればいけるか？どうなんだろうか。試したことないから未知だな。

いや、まてよ、よく考えてみると性体験において勃起は必ずしも必要なものではないかもしれない。そう、それならばもう、逆に挿入してもらえばいいのではないか。それもありなのではないか？

何となく横のイケメンに目をやる。この人の性的指向はどっちなんだろう。そんなことを考えながら、また不躰にイケメンの横顔を眺めてしまっていた。

「……朔、イチゴはもういいのか？」

名前を呼ばれたほうを向く。翔一が目で俺を咎めていた。たぶん、見すぎ！といった感じだろうか。ごめんなさいという意味を込めて、俺は頷いた。

お皿に乗った最後の一つのイチゴを見つめながら、俺は再び考えた。

真面目な話、俺は勃起不全なわけではない。朝立ちだって時折ある。ということは、おしりを使うことは理にかなっているのではないか。なぜなら、直腸から前立腺を刺激して勃起を促す行為は昔医学的にも行われていたとかいないとかって、どこかでなんかの本に書いてあった。

ちらっと翔一を見る。こういうことは、男性経験のある翔一や晴香に聞くのが一番だろうが、なんか怒られそうだからやめておいたほうがいいかな。俺の視線に気づいた翔一が首をかしげる。

「どうした？ まだ足りなかったか？」

首を横に振り、俺は最後のイチゴを頬張った。

後ろの席から賑やかで楽しそうな声が聞こえる。俺だって、恋したり欲におぼれてみたりしてみたい。その第一歩として、体に刺激を与えてみるのもいいのかもしれない。もう二十歳も超えたし、大人だ。そんな経験をしたっていいじゃないか。

こんな俺を受け入れてくれる人がいるかわからないけど、これも一つの経験だ。やれるだけやってみようと思っ立て、俺は、今もカウンター席でちびちびお酒を飲んでいるイケメンに声をかけてみた。ちなみに、翔一がボックス席にお酒を持って行って、いない隙に。

「あの、お兄さんの恋愛対象は女性ですか？ 男性ですか？」

何の前触れもなしに飛んだ質問に、さすがのイケメンお兄さんも驚いて持っていたグラスを揺らす。戸惑いながらも優しく目を細めてこちらを見る視線もなんだかセクシー光線が出てきそうな感だ。

「いきなりだね。うーん……。いまのところはどっちもかな」

ほう。こんな突拍子もない質問にも真面目に答えてくれる、まじでイケメン。女性も男性も相手にできるなら、俺に挿入することも可能そうだ。あ、でもさすがに好みはあるか。

「そうですか」

聞いたはいいが、その先どういう風に誘えばいいかわからなくて、会話終了。

やっぱり言葉って難しいな。ただ誘ったとしても、自分の状況も説明しなければいけないし、どうやって話を展開させればいいのか、わからない。

「もしかして、誘ってる？」

なんとありがたいことに、むこうから会話を広げてくれた。空気も読めちゃうんだな。これがイケメンのスキルなのか。

「そうですね」

「セックス、したいの？」

「はい」

軽いテンポで自然と会話のリズムに乗れてる俺。

短い会話でも彼の醸し出す雰囲気、数多の世を渡り歩いてきたであろう技量の違いを見せつけられた気がした。俺の言葉がするすると彼に吸い寄せられている。

「いいよ」

そしてまた、なんと軽い。

男前はやはり経験豊富でその辺の受け入れもゆるいのかもかもしれない。まあ、俺の状況からしたら経験豊富な人のほうが導いてもらうにはうってつけか。

「ひとつ、先に伝えておきたいんですけど、俺、性欲はないんです」

「え？　じゃあ、どうしてセックスしたいの？」

イケメンお兄さんは、ほんの少し眉間にしわを寄せてすぐに優しい顔に戻す。そりゃ、驚くよな。意味わからんもんな。俺もそう思うよ。

「知りたくて。どういうものなのか」

「そうなんだ。じゃあ、今から行く？　ホテル」

わお！行動力すごいな。これがワンナイトなのか。大人の世界だ。なんだか小説みたいで少しワクワクしてきた。

ただ、唐突に決めたことだから何の準備もしていない。挿れることができるかもわからないうえに、性的興奮するかもわからない。前立腺を刺激して勃つかもわからない状態で、相手に楽しんでもらうことができるのだろうか。

せっかく俺のわがままに付き合ってもらうのだから、せめて楽しんでほしい。挿れられる側なら、必ずしも勃つ必要はないのかもしれないけど、誘ったくせに、なんだよ！と怒らせてしまわないだろうか。

まずは、準備して自分で確かめてみてからのほうがいいのかもしれない。

頭の中で思考をまとめる俺を、彼は静かに待っている。本当に身も心もイケメンだ。そんな彼を怒らせてはダメだな。
「今日はやめておきます」
「そっか、残念」

社交辞令かもしれないが、本当に残念と思っていていたら少しいないな。もしも、次の機会があったなら、それまでにはきちんと準備をしておこう。

これからの楽しみが増えたことが嬉しくて、知らずに顔が緩んでしまっていたのをイケメンに見られ、少し笑われてしまった。
「連絡先交換しようか」

俺は笑われてしまったのが少しだけ恥ずかしいのと連絡先を聞かれたことによって次の機会が近づいた照れで、目線を下げてこくこくと頷くだけで答えた。

「準備ができたら言って。セックスしよう」

とても穏やかな表情で言うセリフではないが、イケメンが言うとなんでも様になる。ちゃんと約束してくれるということは、社交辞令ではなく本当に残念と思っているっぽいので、やはり少しいない。これは一種のときめきなのか。そう考えると、なお嬉しく感じる。

もしかしたら俺にも——という期待が生まれる。

新たな一步を踏み出せてよかった。まだ何も始まっていないけれど、そんな予感だけでも楽しいものなんだな。

「ありがとうございます」

そんな楽しみを与えてくれたイケメンに感謝し、翔一に声をかけてから今日はもう帰ることにした。

バーの扉を出てしばらく歩いたところで、スマホの画面をつける。

店を出る前、連絡先を交換した。その時のSNSが開いたままの画面には、ベンチプレスのベンチの上にモモンガが両手を広げているぬいぐる

みが置いてあるというなんとも可愛らしい意外なアイコン。その下には taiki と表示されている。

そして、メッセージ画面を開くと〈市来朔太郎〉〈浅香泰希〉とお互い律儀にフルネームのやり取りをした履歴が出てくる。まあ、俺が最初に漢字でフルネームを送ってしまったから、優しい彼もきちんと同じように返してくれたのだ。

やはり身も心もさらっとイケメンなんだな、と思いながら俺はゆっくりと家路についた。